

## 「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成 27年 9月 24日

所属：教育文化学部国際言語文化課程 学年：4年

氏名：柴田 朱里

研修先大学・機関名等（国）：県立図書館”ペトレ・ドゥルフ”日本語・日本文化クラブ  
（ルーマニア）

在籍身分：ボランティア講師

渡航年月日：2015年 9月 7日

帰国年月日：2015年 9月 23日

### ○研修先での学習内容等

- ・ブカレストで行われた日本大使館・国際交流基金後援の日本語国際シンポジウム（3日間）に参加、日本文化に関するプレゼンテーション発表。
- ・ブカレストにあるルーマニア日本大使館に訪問、実際に現場で広報文化班として活躍されている高松さんとお会いして大使館での仕事、ルーマニアでの日本語教育の実情のお話を伺う。同じく大使館で働く一方日本文学のルーマニア語翻訳でも活躍されているフロレンティーナさんともお会いし、お仕事のお話や日本やルーマニア文化についてのお話を伺う。
- ・バヤ・マレにおいて県立図書館の日本語クラスに参加。①ルーマニアと日本の文化交流—両国プレゼンテーションによる発表、そしてルーマニアの伝統的なダンスを教わる。②日本文化ワークショップ—習字の説明と実践。③日本語会話練習・ワークショップ—日本食の紹介。その後日本のレストランでの会話練習を実際のメニューを用いて行う。日本のお菓子をふるまい、みんなでおしゃべりを楽しんだ。また折り紙のワークショップも行う。計3回（1回の授業時間2時間）の授業を担当、実施。
- ・バヤ・マレのハンガリー学校（幼稚園～中学校）と公立高校の英語の授業への参加・観察。
- ・ブカレストやバヤ・マレ、クルージュ・ナポカの歴史的遺跡や観光地や共産主義時代の歴史博物館訪問、自然とのふれあいを通してルーマニア文化やトランシルバニア地方の文化を学ぶ。

### ○研修期間の生活面について

革命からまだ20数年しか経っておらず経済の格差によるホームレスの姿やロマ（ジプシー）の姿をよく町中で見かけることが多かった。日本に比べ物価や月収や物が安いため中にはお金に貪欲な人もいて観光客が狙われやすく特にタクシーに乗る際や貴重品の管理には常に注意していた。それらを除けば食事もおいしく（チーズやサワークリーム等乳製品が食事に欠かせない）、人も親切で親しみやすく、町並みも東欧の美しさを残していてとても魅力的な国だと感じた。

## ○研修期間全般にわたる感想

今回の研修旅行では本当に貴重な経験をさせていただき、たとえば国際シンポジウムへの参加では日本文化に関する興味深い研究をきけただけでなく実際に私たち自身も学部生ながら発表の場をいただけたこと、ルーマニア大使館の方々とお会いして直接お話しを聞いたこと、地方の学校の英語授業観察、そして日本語クラブの授業において多くの学習者と交流できたこと・・・のようにわずか2週間の研修旅行であったが毎日がとても濃く、学ぶことの多い期待以上の研修であった。

日本語を学びたい人はルーマニアに多くいるがネイティブの日本語教師は少なく、特に地方では日本人自体を見るのも珍しいという現実問題があるが、それでも今回参加した地方のバヤ・マレの日本語クラブでは小学生から大人まで日本語を学びたいという人が意欲的に学習していた。多くの人たちが私たちの訪問を歓迎してくださり、また一緒に授業を通して日本文化の活動や、お互いの文化交流の場を持てることができ、毎回の授業活動を楽しみながら行うことができた。今後もさらに日本に興味をもって日本語学習に取り組むきっかけになってくれたらとても嬉しい。

同じルーマニア国内であっても首都のブカレストと北の都市バヤ・マレでは雰囲気がとても異なりそれぞれの地域の特色を比較できたことも大きな収穫だと考える。ルーマニアでは引率の先生と一緒に観光地や歴史的博物館、世界遺産を訪れたり、隣の都市クルージュへ小旅行にもでかけたりと美しいルーマニア文化を知るという面でもとても充実した活動ができた。

今回の研修旅行を入念に計画してくださり、また研修旅行に向けて事前・事後のサポートも手厚く行ってくださったエマ・モリタ先生を始めルーマニアで付き添ってくださった先生や学生、そして私たちを温かく歓迎してくださった多くのルーマニア人の方々に感謝したい。

## ○今後の勉学計画

教育文化学部ということもあり英語教育にも関心があり教員免許取得に向けて様々な専門的授業をとったり、教育実習にも行ったりしたあとで今回ルーマニアの英語教育という日本の教育とは全く異なった授業を実際に観察できたのはとてもいい経験になった。また将来的には日本語教師を目指していて現在アメリカでの日本語教師プログラムにも応募を検討しているため今回日本語学習者との交流や授業の実施経験も意味のあるものとなった。日本語を学びたいたくさん人はいるが現地で働くネイティブの教師が圧倒的に少ないという現実問題をふまえて今後さらに日本の文化や良さを世界に発信して、一人でも多くの人に魅力を伝えるためにも今後もこの夢を追い続けていきたいと考える。



